

鹿児島県大隅半島内之浦方言の狭母音と接近音¹

高城隆一

taki.ryuichi.0816@gmail.com

キーワード：鹿児島方言 内之浦方言 音韻論 形態音韻論 音節構造 音節末子音
狭母音 接近音

要旨

本稿では、内之浦方言の音節構造を記述し、分析上特に問題となる狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ について議論する。はじめに音素目録と音節構造を示す。内之浦方言において音節が音韻論的に重要な単位であることを示す証拠として、高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位として音節が用いられていることを挙げる。次に内之浦方言の狭母音と接近音について次の2点を主張する。(i) 二重母音が存在せず、音節末に接近音の /j/ が認められる。(ii) わたり音のスロット (=G) を埋める接近音に /j, w/ の2つが存在し、これらが頭子音 (=C₁) との共起の有無にかかわらずGに立つ。さらに、Levi (2011) の通言語的研究を参考に、形態音韻規則に基づいて基底と表層における狭母音と接近音の関係を議論する。

1. はじめに

本稿では、鹿児島県肝属郡肝付町^{きもつき きもつきちやう}内の旧内之浦町^{うちのうらちやう} (図1) で話されている伝統方言 (以下、内之浦方言) の音節構造を記述し、分析上特に問題となる狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ について議論する。本稿の主張は次の2点である。(i) 二重母音が存在せず、音節末に接近音の /j/ が認められる。(ii) わたり音のスロット (=G) を埋める接近音に /j, w/ の2つが存在し、これらが頭子音 (=C₁) との共起の有無にかかわらずGに立つ。

旧内之浦町は鹿児島市からフェリーと車で南東に約2時間30分、80kmほど離れた大隅半島東岸^{おすみ}に位置しており、北から順に北方^{きたかた}、南方^{みなみかた}、岸良^{きしら}の3地域に分かれる。鉄道や高速道路はなく、バスの本数も限られており、現地への移動は車が最も効率的である。平成17



図1 九州南部の地図

¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および、JSPS 科研費 17H02332、20J22969 の助成を受けたものである。長時間の調査にご協力いただいた内之浦の皆様^{おすみ}に御礼申し上げる。肝付町教育委員会と肝付町シルバー人材センターの方々には方言話者の方々をご紹介いただいた。本稿は令和2年10月17-18日にオンラインで開催された、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催の第18回文法研究ワークショップ「音節構造の諸問題」で使用した発表原稿を加筆修正したものである。ワークショップにおいて多くの有益な質問やコメントを賜った。発表原稿の草稿に対しては以下の方々から貴重なご意見および情報をいただいた：石塚政行、占部由子、カルリノ・サルバトーレ、下地理則、松岡葵、林愷娣 (敬称略)。論文化にあたっては青井隼人氏と中澤光平氏からコメントをいただいた。

年に旧高山町^{こうやまちょう}と合併し肝付町となったことで、自治体としての内之浦町は消滅した。肝付町の住民基本台帳人口によると、旧内之浦町地域の総人口は、過去約9年半（平成23年8月～令和3年3月）で7割程度に減少している。さらに、令和3年3月末現在の総人口2,850人の内54.4%が65歳以上であり、平均年齢は62.15歳である。国内の多くの伝統方言と同様に年齢が下がるほど継承者が少なく、若年層にはほとんど引き継がれていない。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では音素目録と音節構造を示す。第3節ではアクセント体系に注目し、内之浦方言において音節が音韻論的に重要な単位であることを示す。第4節では狭母音と接近音に関する分析上の問題点として、二重母音と音節末子音（第4.1節）、わたり音のスロット（第4.2節）、基底と表層の関係（第4.3節）の3項目を取り上げる。第5節は結論である。

2. 音素目録と音節構造

内之浦方言の音素目録を表1と表2に示す。母音音素は /i, u, e, o, a/ の5つであり、子音音素は /p, b, t, d, k, g, s, z, h, m, n, r, j, w/ の14である。

表1 母音音素

	前舌	奥舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表2 子音音素

		両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g	
摩擦音	無声		s			h
	有声		z			
鼻音		m	n			
はじき音			r			
接近音				j	w	

表2に示した子音音素のうち音節末に立つものは /t, s, n, j/ の4つである。音節末子音のうち摩擦音 /s/ については高城（2019）で詳細に論じた。

(1) に音節構造を示し、(2) に語例を示す。以下でCは子音、Gはわたり音、Vは母音を表す。音節境界は /./ で示す。(2) では音素表記、音声表記、意味、音節構造の順で語例を示し、音素表記と音節構造では該当箇所を太字で示している。

(1) (C₁) (G) V₁ (V₂) (C₂)

- (i) C₁には /j, w/ 以外の子音音素が入る。固有語の語中かつ直前の音節が尾子音を持つ場合には必須である。
- (ii) Gには /j, w/ が入る。共起できる母音音素はGが /j/ の場合 /u, o, a/ に、 /w/ の場合 /e, o, a/ に限られる。ただし /we, wo/ は限定的であり、いずれも固有語の基底には存在せず音韻規則による派生を経て実現する。
- (iii) V₁とV₂にはすべての母音音素が入る。V₂に入る音素はV₁と同じものに限られる。
- (iv) 語頭には、V₁に入る成節子音 /n/ のみの音節も出現できる。この音節には頭子音として鼻音を持つ音節が必ず後続する。
- (v) C₂には語中・語末にかかわらず /t, s, n, j/ が入る。

(2) 音節構造を示す実例

V :	/o/	[o]	「尾」	(V)
V :	/n.ma/	[ᵐma]	「馬」	(V.CV)
GV :	/ja.ma/	[jama]	「山」	(GV.CV)
CV :	/ha/	[ha]	「葉」	(CV)
CVV :	/zii.san/	[zi:san]	「爺さん」	(CVV.CVC)
CGV :	/a.kja/	[ak'a]	「秋=TOP」	(V.CGV)
VC :	/un/	[un]	「海、ウニ」	(VC)
GVC :	/jut/	[juʔ]	「雪」	(GVC)
CVC :	/kas/	[kaç]	「火事」	(CVC)

(1-iv) で述べた成節子音を持つ音節は (3) のような語に現れる。

(3) a. /n.ma/ [ᵐma] 「馬」 b. /n.me/ [ᵐme] 「梅」

(3) の2語ではどちらも2つの鼻音の間でピッチ上昇が観察される場合とピッチ下降が観察される場合がある²。内之浦方言ではピッチ下降は1音節語においても観察されるものの、ピッチ上昇が観察されるのは2音節以上の語に限られる。これを踏まえると、ピッチ上昇が観察される問題の2語はどちらも2音節であると解釈するのが妥当である。

(3) のような語の語頭音節は、下地 (2018) が南琉球宮古語伊良部島方言の記述で「準音節」と呼んでいる構造と類似している。伊良部島方言の準音節は語頭音節より前に現れ、成節子音のみで構成される音節で、(4) のように共鳴音の /m, n, v/ が立つ。

² アクセント体系については第3節で詳述する。

- (4) a. /m.ci/ [m̥tsi] 「道」 (R.CV)
 b. /nn.di/ [n̥di] 「うん／はい」 (RR.CV)
 c. /v.cca/ [v̥tsa] 「うずら」 (R.CCV)

下地 (2018: 16)、R は共鳴音を表す

伊良部島方言では、形態音韻規則を適用した場合の振る舞いという独立した観点から見ても、準音節という概念が必要であるという。これに対して内之浦方言の問題の音節には、頭子音として鼻音を持つ音節が必ず後続するという共起制限があり、分布と構造が特殊ではあるものの、伊良部島方言のように準音節を認めることを支持する独立した証拠は見つかっていない。そのため本稿では、語頭音節に前接する特別な音節を新たに設定することはせず、(3) のような語では語頭音節の V_1 に /n/ が立つと解釈する。

3. 音韻論的単位としての音節

内之浦方言のアクセント体系では、高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位が共に音節である。これは、音節が内之浦方言において音韻論的に重要な単位であることを示している。高城 (2020a) では内之浦方言のアクセント体系を観察し、音節数の多寡にかかわらず2つのアクセント型が実現することを報告した。1つは拡張語 (=語+0 個以上の接語; 下地 2018) の次末音節のみが高い型であり、もう1つは拡張語の最終音節のみが高い型である。さらに「雨」、「雨が」など拡張語を単独で発話したときのアクセント実現には揺れが見られ、2つのアクセント型が任意に表れることも報告した。(5) に2音節拡張語の例、(6) に3音節拡張語の例を示す。いずれも拡張語を単独で発音した際の例である。音節境界でのピッチの上昇を [で、下降を] で、音節内部での下降を]] で表す。語例は1段目に音声表記、2段目に音素表記、3段目に意味をそれぞれ示す(断りのない限り以下でも同様)。音声表記中の ~ は発音に揺れがあることを示す。

(5) 2音節拡張語

ha]ga ~ ha[ga	a]me ~ a[me
ha=ga	ame
葉=NOM／歯=NOM	雨／飴

(6) 3音節拡張語

ha[bak]kaj ~ habak[kaj ~ habak[kaj]]	a[me]ga ~ ame[ga	mi[ja]ko ~ mija[ko
ha=batkaj	ame=ga	mijako
葉=RST／歯=RST	雨=NOM／飴=NOM	都

高城 (2020a: 275-276)

次末音節と最終音節の間で上昇し、音節内部で下降する **habak[kaj]** を除くと、上記の例では高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位が共に音節である。仮に高音調を担う単位がモーラであれば、(6) の **ha[bak]kaj** と **habak[kaj]** はそれぞれ **haba[k]kaj** と **habakka[j]** であることが予測されるが、このような音調は観察されていない。これはほかの子音が音節末にある場合や、長母音の場合にも同様である。

habak[kaj] のような次末音節と最終音節の間で上昇して音節内部で下降する例は、拡張語の最終音節が閉音節である場合で、かつ音節末子音が /n, j/ のいずれかである場合という音韻論的に限られた環境でのみ観察できる。この例は上記の一般化の例外であり高音調を担う単位は音節であるが、高音調の位置を数える単位はモーラであると分析できる。

4. 狭母音と接近音

本節では、音節構造の記述にあたって生じる分析上の問題点のうち、狭母音と接近音について議論する。第4.1節では、内之浦方言に二重母音を認めずに、音節末接近音の /j/ を認める分析を提示する。第4.2節では、音節頭の接近音 /j, w/ が頭子音のロット (=C₁) には立たず、常にわたり音のロット (=G) に立つことを示す。第4.3節では、狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ の基底と表層の関係を検討する。

4.1. 二重母音と音節末子音

内之浦方言では二重母音は出現しない。内之浦方言の属格標識には2つの異形態があり、(7)のように明らかに子音終わりである名詞の後には /no/ として現れ、(8)のように明らかに CV 音節終わりである名詞の後には /n/ として現れる。(9)のように語末に母音連続を持つ名詞の後には /n/ として現れる。

5

(7)	ku?	kut'no
	kut	kut=no
	口	口=GEN

6

(8)	sora	soraN
	sora	sora=n
	空	空=GEN

7

(9)	kao	kaon
	kao	kao=n
	顔	顔=GEN

語末に /j/ を持つと分析している名詞の例を (10) に挙げる。

- (10)
- | | | | | |
|----|-----|-----|-----|----|
| aj | haj | φuj | saj | aj |
| aj | haj | huj | saj | aj |
| 蟻 | 春 | 冬 | 猿 | あれ |

(11) に示す通りこれらの後に現れる属格標識は、明らかに子音終わりである (7) の例と同様に /no/ である。ここで仮に (10) に示した名詞の語末が母音音素の /i/ であれば、(9) と同じく語末に母音連続を持つ例ということになり、(12) のように実現することが予測されるが、これは不適格である。

- (11)
- | | |
|----|-------|
| aj | ajno |
| aj | aj=no |
| 蟻 | 蟻=GEN |

- (12)
- | | |
|--------|------------|
| *ai | *ain |
| ai | ai=n |
| 蟻 を意図。 | 蟻=GEN を意図。 |

上記のように属格標識の異形態選択を観察すると、(10) のような名詞の語末音素が子音であることが示唆される。

一方で、上記の異形態選択が単に超重音節構造を避けるためのものであるとする分析も可能であるように見える。ただし、仮にこれが妥当である場合、当該音素が /j/ であることを支持する証拠はなくなるものの、これは当該音素が /j/ であることを否定するものでも、当該音素が /i/ であることを支持するものでもない。

アクセント体系を観察すると、(9) のような母音連続の間にはピッチの変動が見られる。これはこの箇所には音節境界があることを示唆している。そのため、異なる母音の連続と仮定しうる /V₁V₂/ において同一音節内にあると考えられるのは (10) が二重母音である場合、すなわち /V₂/ = /i/ である場合以外には存在しない³。これに対し、(1-v) に示したように、音節末子音は /j/ を除いても語中・語末にかかわらず /t, s, n/ の3つが既に存在する。これらを踏まえ、本稿では (10) のような語が音節末に接近音を持つとみなして議論を進める。

4.2. わたり音のスロット

第2節の (1) ではわたり音のスロットである G を埋める接近音に /j, w/ の2つが存在し、

³ このため、上記の異形態選択が単に超重音節構造を避けるためのものであるか否かという問題を解決するためには最終音節に長母音を持つ語を用いて調査する必要があるが、現時点では検証できておらず今後の課題である。

「C₁との共起の有無にかかわらずGの位置に立つ」という分析を提示した。一方で(13)のように接近音で始まる語があることに基づいて「C₁が存在しない場合には自身がC₁を埋める」と分析できる可能性もあるように見えるが、本稿では採用しない。

11

- (13) a. ju? b. wasuru?
 jut wasurut
 雪 忘れる.NPST

(14)のような語の構造を考えると前者の分析が適切であることが分かる。内之浦方言では固有語の語中で直前の音節に尾子音がある場合に、頭子音のない音節が許容されない⁴。(14a)では基底で子音終わりの接頭辞 //it-// と接近音始まりの動詞語根 //juw-// が連続している。(14b)では基底で子音終わりの動詞語根 //kak-// と接近音始まりの接尾辞 //jar-// が連続している。下記では便宜上動詞の語幹のみを表示している。矢印の右側に挙げている派生後の形式(とその不適格な形式)では音節境界も示している。以下の例文中で /// は基底、// は表層の音韻表記であり、「→」は派生の方向を示す。「*」は当該形式が不適格であることを示す。

12

- (14) a. //it-juw-// → /it.tjuw/ * /it.juw/ * /i.tjuw/ 「PFX-言う」
 b. //kak-jar-// → /kak.kjar/ * /kak.jar/ * /ka.kjar/ 「書く-HON」

(14)では子音終わりの形態素と母音始まりの形態素が語中で連続した際に、* /it.juw/ や * /kak.jar/ のような尾子音と接近音が連続する構造を避けるために /it.tjuw/ と /kak.kjar/ のように先行する音節の尾子音が後続する音節の頭子音としてコピーされている⁶(以下ではこの現象を「重子音化」と呼ぶ)。(15)のように尾子音に後続する音節の頭子音が既に存在する場合には重子音化が起こらないことから、(14)の接近音は頭子音(=C₁)のロットではなくわたり音(=G)のロットにあると考えられる。

13

- (15) //it-toke-// → /it.to.ke/ * /it.tto.ke/ 「PFX-溶ける」

語中で直前の音節に尾子音がある場合に、頭子音のない音節を避けるための方策としては上で見た重子音化ではなく * /i.tjuw/ や * /ka.kjar/ のような分節音が変わらないものの存在も考えられる。実際に(14b)と同じ動詞語根に連結母音(第4.3.1節で詳述する)を持つ接尾辞が

⁴ /ame/ 「雨」や /un/ 「海」のように母音始まりの語が存在するため、「固有語の語中で直前の音節に尾子音がある場合」という環境以外においてはC₁のない構造(=母音始まりの構造と、わたり音始まりの構造)も適格である。

⁵ 接頭辞の有無による意味の違いについて話者に尋ねると、「接頭辞がある場合には強調しているように感じる」という趣旨の回答があった。接頭辞の機能についての詳細な記述は今後の課題である。

⁶ これにより Syllable Contact Law にも従う構造となる。

ついた (16) では、(14b) と並行的な */kak.kan/ ではなく /ka.kan/ が出力される。

14

(16) //kak-^an// → /ka.kan/ */kak.kan/ 「書く-NEG」

上記の両方策はどちらも直前の音節に尾子音がある場合に、頭子音のない音節を避けるためのものである。両方策の違いについては次のように説明できる。(16) の /kak-an/ が形態素境界が反映された /kak.an/ ではなく /ka.kan/ として実現するのは、いわゆる Onset First Principle が適用されることで、固有語の語中で母音間の子音が、尾子音ではなく頭子音として実現するためである。すなわち VCV の音素連続が VC.V ではなく V.CV として実現する。これに対して (14) の /it.juw/ や /kak.jar/ では問題の音素連続が VCV ではなく VCG である。VCG における C は母音間ではないため、Onset First Principle が適用されずに形態素境界が反映されて VC.G となる。ここから予測される形式はそれぞれ /it.juw/ と /kak.jar/ であるが、これでは頭子音のない音節が尾子音の直後に出現することになる。ここで重子音化が生じることでこの構造が回避され、/it.tjuw/ と /kak.kjar/ が出力される。

4.3. 狭母音と接近音の基底と表層の関係

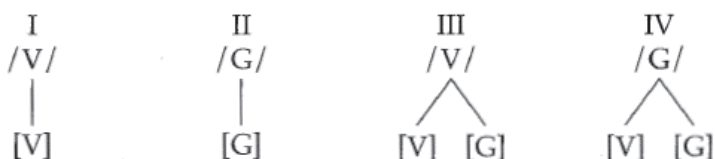
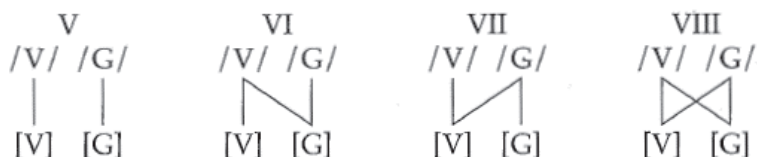
内之浦方言の狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ の間には形態音韻論的に非対称的な振る舞いが観察される。基底に存在する //u// と //w// の対立が表層に反映されるのに対して、基底に存在する //i// と //j// の対立の一部は表層で中和する。

Levi (2011) は狭母音の /i, u/ と接近音⁷の /j, w/ に関する通言語的研究によって、基底における狭母音と接近音が表層で音節主音として実現する場合とそうでない場合があることを示した。言語ごとの振る舞いの違いに基づいて Levi (2011: 353) では (17) のような音素と実現形の組み合わせの 9 つのタイプが提案されている⁸ (9 つ目は狭母音も接近音も存在しないタイプであるため (17) には表示されていない)。同一言語内において複数のタイプが観察されることもあるという (Levi 2011: 353)。

15

⁷ Levi (2011) の用語では「glide」であるが、便宜上本稿の用語に合わせて「接近音」という訳語を当てる。

⁸ 本稿で内之浦方言の例を提示する際には一貫して基底を // // で示し、派生過程と表層の音素表記を / / で、表層の音声表記を [] で示している。これに対して Levi (2011) は基底を表示する記号として // 、表層を表示する記号として [] を用いており、本稿でも Levi (2011) を引用した箇所では原文の表記に従う。

(17) *One underlying segment**Two underlying segments*

Levi (2011: 353)

I~IVは基底に狭母音 /V/ もしくは接近音 /G/ のうちどちらか1つが存在するタイプであり、V~VIIIは基底に狭母音と接近音の両方が存在するタイプである。I~IIとVでは基底と表層が全て一致するのに対し、III~IVとVI~VIIIでは基底と表層が一致しない場合がある。内之浦方言ではこのうち /u, w/ でV、 /i, j/ でVIのタイプが観察される。上述のとおり、VとVIIはいずれも基底において狭母音と接近音の対立がある。このうちVIでは基底における狭母音に表層で音節主音として実現するものとそうではないものが存在する。

Levi (2011) がVIの例として挙げているカルク語 (Karuk) の例を (18) に示す。カルク語では音節内での母音連続が許容されない。隣接する母音が同一形態素内にある場合、基底の狭母音は (18a) のように表層で接近音として実現する。基底における狭母音の連続は (18b) のように1つ目の狭母音が接近音として実現する。

14

(18) a. High and non-high vowels

/ʃakai/	→	[ʃakaj]	'to be disgusted by'
/ʃupiau/	→	[ʃupjaw]	'to sort'
/taiau/	→	[tajaw]	'to choose'

b. Two high vowels

/imuiira/	→	[imwira]	'fishery'
/imiuha/	→	[imjúha]	'soap plant'
/suniiθih/	→	[sunjθih]	'nut of a giant chinquapin'

Levi (2011: 357)、太字は引用者による

これに対して (19) の表層では、狭母音 [i] の直後に接近音 [w] が現れている箇所がある。Levi(2011)はこの [w] が /u/ から派生したものではなく、基底でも /w/ であると述べている。

(19) Second vowel surfaces as a glide

/uir**iw**saw/ → [wir**iw**ʃaw] 'to bequeath to'

Levi (2011: 357)、太字は引用者による

仮に基底でこの箇所には狭母音の連続があれば、(18b) と同じく 1 つ目の狭母音が接近音として実現し [wir**j**usaw] となることが予測されるが、実際にはこれと異なる形が得られることが (19) に示されている。

カルク語の基底に (/u/ だけでなく) /w/ が存在する証拠はこのほかにも挙げられている。(20) では形態素境界の [w] に 2 種類の異なる振る舞いが見られる。

(20) a. Phonemic glide /w/

/api w /	→	[ʔápi w]	'to seek'	
		[ʔápi m -tih]	'to be seeking'	*[ʔápi w -tih]
/ʔu-ʔa w /	→	[ʔu-ʔa w]	'he eats'	
		[ʔa m -kira]	'place for eating'	*[ʔa w -kira]

b. Sonorant /r/

/sir/	→	[sir]	'to disappear'	
		[sí: n -kara]	'to swallow'	*[sí: r -kara]

c. Derived glide /u/

/ikriu/	→	[ikri w]	'to sit'	
		[ikri w -ʃak]	'to sit in the way'	*[ikri m -ʃak]

Levi (2011: 357)、太字は引用者による

(20a) では共鳴音である接近音の /w/ が子音始まりの接尾辞の直前にある場合に鼻音と交替することが示されている。(20b) から分かるように、この振る舞いは同じく共鳴音である /r/ と同様である。これに対して (20c) の表層では子音始まりの接尾辞の直前に [w] が存在しており、(20a) と振る舞いが異なる。Levi (2011) は (20c) の [w] の基底が狭母音の /u/ であると分析しており、(20a) の /w/ はこの /u/ と対立している。

Levi (2011) はこれらの現象に基づいて、カルク語の /u, w/ では基底にも表層にも狭母音と接近音の両方が存在し、このうち基底の狭母音は表層で狭母音として実現することも接近音として実現することもあるとして、(17) のうち VI のタイプに分類している⁹。以下では Levi (2011) の議論を参考に、内之浦方言の狭母音と接近音の基底と表層の関係について検討する。

⁹ なお、カルク語の /l/ はタイプ III に当てはまる (Levi 2011: 353)。

4.3.1. 狭母音 /u/ と接近音 /w/

まず狭母音の /u/ と接近音の /w/ を検討する。第2節で示したように /u/ が母音のロット (=V₁ と V₂) に入るのに対して、/w/ はわたり音のロット (=G) に入る。内之浦方言は基底で //u// と //w// が区別される。加えて基底における //u// が表層で /w/ として現れる例も基底における //w// が表層で /u/ として現れる例も観察されていないため、(17) ではVに分類される。ただし、後述のとおり形態音韻規則による派生過程において //w// → /u/ が確認できるため、今後の調査結果次第ではVIIIに分類される可能性もある。Levi (2011: 355) は (17) のうちIVとVIIに該当する現象を持つ言語が見つかっていないと述べており、/G/ が表層で [G] と [V] の交替を示すのであれば、その言語では /V/ も表層で [G] と [V] の交替を示すという含意普遍を導いている。仮に内之浦方言の /u, w/ がVIIのタイプであればこの含意普遍は成り立たないことになる。

内之浦方言において基底に //w// が存在することを示す現象として動詞の形態音韻論が挙げられる。内之浦方言の動詞は語根が子音で終わるもの（以下、子音語根）と母音で終わるもの（以下、母音語根）に大別される。このうち (21a) に示す動詞語根 //kow-// は否定接尾辞 //^an// を付加した際の振る舞いが (21b-e) に示す子音語根と同じであり、(21f) に示す母音語根とは異なることから、語根末に母音の //u// ではなく子音の //w// を持つと考えられる。

19

(21)	語根	否定形	
a. 買う	//kow-//	/kow-an/	[kowan] */kow-n/ */kou-n/
b. 書く	//kak-//	/kak-an/	[kakan] */kak-n/
c. 持つ	//mot-//	/mot-an/	[motan] */mot-n/
d. 消す	//kes-//	/kes-an/	[kesan] */kes-n/
e. 飲む	//nom-//	/nom-an/	[noman] */nom-n/
f. くれる	//kure-//	/kure-n/	[kuren] */kure-an/

否定接尾辞 //^an// において上付き文字で示している //^a// は清瀬 (1971) のいう連結母音である (黒木 2015: 32-33 と高城 2020b も参照)。連結母音と連結子音の実現は (22) のように一般化できる¹⁰。

20

(22)	連結音実現規則
a.	^C → C / V- ₋ → Ø / C- ₋
b.	^V → V / C- ₋ → Ø / V- ₋

黒木 (2015: 33) を一部改変。

¹⁰ 本稿では連結音を接尾辞の一部とする分析を採用した。これを語幹の一部とする分析も可能であるようにも見えるが、その場合には注 12 に示す現象についての「形態素境界でのみ生じる」という説明が成り立たなくなる。

すなわち、連結子音 $/l^c/$ は母音の直後で子音として実現し、子音の直後では実現しない。連結母音 $/l^N/$ は子音の直後で母音として実現し、母音の直後では実現しない。

基底の $//w//$ が表層で $/u/$ として出現している例は未確認であるが、(23) のような例では形態音韻規則による派生過程において $//w// \rightarrow /u/$ の交替が想定できる。

11

(23) $//kow-ta// \rightarrow /kou-ta/ \rightarrow /ko-ta/$ [kota] 「買う-PST」

(23) では $//w// \rightarrow /u/$ の交替がなされた後に、 $/ou/ \rightarrow /o/$ の母音融合が生じている。この環境で母音融合が生じることは (24) のような例があることからわかる。

11

(24) $//oso-u// \rightarrow /oso/$ [oso] 「遅い-ADV」¹¹

類似の形態音韻現象を持つ近隣方言において (23) のような環境で母音融合規則が適用されない体系が存在すれば、その方言では基底の $//w//$ が表層で $/u/$ として実現している可能性がある。

基底に $//u//$ が存在することを示す現象としても動詞の形態音韻論が挙げられる。(21) で見た $//^a u//$ のように、内之浦方言の動詞接尾辞には連結母音を持つと分析できるものが存在することが筆者の調査で明らかになっている。このうち意志接尾辞 $//^a u//$ は連結母音を持ち、母音に後続するときには連結母音が実現せず $/-u/$ となるのに対し、子音に後続するときには連結母音を実現し $/-au/$ から母音融合を経て $/-o/$ となる。上記の通り内之浦方言において $/w/$ は子音であるため、仮に意志接尾辞が $//^a w//$ であれば母音融合規則が適用されず、表層形を正しく導くことができない¹²。このため意志接尾辞の基底形は $//^a u//$ であると考えられる。したがって内之浦方言では $//w//$ と $//u//$ がともに基底に存在していることになる。

4.3.2. 狭母音 $/i/$ と接近音 $/j/$

次に狭母音の $/i/$ と接近音の $/j/$ を検討する。第2節で示したように $/i/$ が母音のスロットに入るのに対して、 $/j/$ はわたり音のスロットと尾子音のスロット (=C₂) に入る。内之浦方言の基底では $//i//$ と $//j//$ が区別される。基底における $//i//$ が表層で $/j/$ として現れる例が観察できている一方で、基底における $//j//$ が表層で $/i/$ として現れる例は観察できていないことから (17) の分類ではVIに当てはまる。

内之浦方言において基底で $//i//$ と $//j//$ が区別されることを示す現象として、名詞と接語の間で生じる音韻規則が挙げられる。筆者の調査結果に基づくと、内之浦方言の主題標識の基底形は $//^w a//$ であると分析できる。この主題標識は (25a-b) のように母音に後続するときには $/=wa/$ として実現し、(25c-f) のように子音に後続するときには $/=a/$ として実現する。

¹¹ 副詞化接尾辞が $//-u//$ であることは、 $//haja-u// \rightarrow /hajo/$ 「速い-ADV」でも確認できる。

¹² 意志接尾辞が $//^a w//$ である場合に、連結音の実現と母音融合の間に $/-aw/ \rightarrow /-au/$ という (23) と同様の $//w//$ から $/u/$ への交替を想定することはできない。この交替が形態素境界でのみ生じる現象であるためである。

23

(25)	連結音実現	重子音化	再音節化			
a. //jabo= ^w a//	→			/ja.bo.=wa/	[ja.bo.wa]	「藪=TOP」
b. //hihi= ^w a//	→			/hi.hi.=wa/	[çi.çi.wa]	「ヒヒ=TOP」
c. //kazj= ^w a//	→	/kazj=a/	→	/ka.zja/	[ka.za]	「火事=TOP」
d. //kutj= ^w a//	→	/kutj=a/	→	/ku.tja/	[ku.tea]	「靴=TOP」
e. //akj= ^w a//	→	/akj=a/	→	/a.kja/	[a.k'a]	「秋=TOP」
f. //un= ^w a//	→	/un=a/	→	/un.na/	[un.na]	「海=TOP」

(25f) では語中で頭子音のない音節を回避するために重子音化が生じている。一方 (25c-e) から分かるように名詞の語末が /j/ である場合には重子音化が生じない。これは重子音化が生じて語末の /j/ がコピーされても上記の有標な構造が回避できないためと考えられる。(25c-e) では重子音化が生じない際に次善策として再音節化が生じていると考える。なお、主題標識が仮に //^a/ であれば、(25c-e) の名詞の基底形をそれぞれ //kaz, kut, ak// と設定することになるが、この場合にはこの環境で重子音化が生じない理由が説明できなくなるため、(25) のように考える妥当性が高い。

第 4.1 節で挙げた音節末接近音を持つ名詞に主題標識を付けると、(26) のように振る舞いの違いが見られる。

24

(26)	連結音実現	再音節化	音節末子音化			
a. //huj= ^w a//	→	/huj=a/	→	/hu.ja/	[φu.ja]	「冬=TOP」
b. //ai= ^w a//	→	/ai=wa/	→	/aj.=wa/	[aj.wa]	「蟻=TOP」

(26a) では主題標識が /^a/ として実現しているため、名詞の基底形が子音 //j// で終わっていると考える。(26b) では主題標識が /^{wa}/ として実現しているため、名詞の基底形が母音 //i// で終わっていると考える。

日本語共通語（以下、共通語）との音対応を考えると、(26a) と同じ振る舞いをする語例が (27) のように共通語の /ju/ と /re/ に対応するのに対し、(26b) と同じ振る舞いをする語例は (28) のように共通語の /ri/ と /ru/ に対応する。共通語においても /ai/ ないし /aj/ のような構造を持つ「愛」「鯉」「姪」などの語は後者の語群に入る。下記では各語例の 2 段目に基底形を示す。

25

(27)	φuj	oj	aj
	huj	oj	aj
	冬	俺	あれ

26

- (28) aj haj saj aj
 ai hai sai ai
 蟻 春 猿 愛

これは基底で //i// と //j// が区別されることを示す例であると同時に、基底における //i// が表層で /j/ として現れる例でもあるといえる。基底における //j// が表層で /i/ として現れる例は観察できていない。

5. むすび

本稿では、内之浦方言の音節構造を記述し、分析上特に問題となる狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ について議論した。第 2 節で音素目録と音節構造を示し、第 3 節ではアクセント体系に注目して、内之浦方言において音節が音韻論的に重要な単位であることを示した。その証拠としてはアクセント体系の観察に基づいて、高音調の位置を数える単位と高音調を担う単位に音節が使われていると解釈できることを挙げた。第 4 節では狭母音と接近音に関する分析上の問題点として下記の 3 項目を取り上げた。二重母音と音節末子音 (第 4.1 節)、わたり音のスロット (第 4.2 節)、基底と表層の関係 (第 4.3 節)。第 4.1 節では二重母音が内之浦方言で認められず、音節末に接近音の /j/ が立つという分析を提示した。第 4.2 節ではわたり音のスロットを埋める接近音に /j, w/ の 2 つが存在し、これらが C₁ との共起の有無にかかわらず G の位置に立つことを示した。第 4.3 節では狭母音 /i, u/ と接近音 /j, w/ について Levi (2011) の通言語的研究を参考に、形態音韻規則に基づいて基底と表層における関係を議論した。

略号一覧

ADV 副詞化 GEN 属格 HON 尊敬 NEG 否定 NOM 主格 NPST 非過去 PFX 接頭辞
 PST 過去 RST 限定 TOP 主題

参考文献

- 清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と：日本語動詞無活用論」『国語学』 86: 56-42.
 黒木邦彦 (2015) 「音韻規則」窪菌晴夫 (監修) 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) 『甌島里方言記述文法書 改訂版』, 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト「鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」. 30-49. 東京：国立国語研究所.
 Levi, Susannah V. (2011) Glides. In: Marc van Oostendorp, Colin J. Ewen, Elizabeth V. Hume and Keren Rice (eds.) *General Issues and Segmental Phonology*, The Blackwell Companion to Phonology. Volume I. 341-366.
 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, シリーズ記述文法 1. 東京：くろしお出版.

高城隆一 (2019) 「鹿児島県肝付町内之浦方言の音節末摩擦音」『東京大学言語学論集』41(eTULIP): e85–e95.

高城隆一 (2020a) 「鹿児島県大隅半島内之浦方言における二型アクセントの痕跡」『東京大学言語学論集』42: 267–282.

高城隆一 (2020b) 「鹿児島県霧島市隼人町方言の自他交替」『東京大学言語学論集』42(eTULIP): e115–e149.

肝付町「住民基本台帳人口」<https://kimotsuki-town.jp/chosei/tokei/2098.html> [令和3年4月アクセス].

High Vowels and Approximants in the Uchinoura Dialect of Kagoshima Japanese

TAKI Ryuichi

taki.ryuichi.0816@gmail.com

Keywords: Kagoshima Japanese, Uchinoura dialect, phonology, morphophonology, syllable structure, syllable-final consonants, high vowels, approximants

Abstract

In this paper, the syllable structure of the Uchinoura dialect, which is spoken in the Osumi Peninsula of Kagoshima Prefecture is reported and high vowels /i, u/ and approximants /j, w/ in the dialect are discussed. After showing the phoneme inventory and the syllable structure of the Uchinoura dialect, the author reports that the syllable plays a phonologically important role in this dialect. It is revealed that (i) the Uchinoura dialect has no diphthongs but approximant /j/ in the syllable-final position and (ii) syllable-initial approximants /j, w/ fill the glide slot regardless of the existence of another onset consonant. By using the framework of the typological study of Levi (2011), the relationships of the underlying forms and the surface forms of the high vowels and the approximants in this dialect are revealed.

(たき・りゅういち 東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員 DC／国立国語研究所)